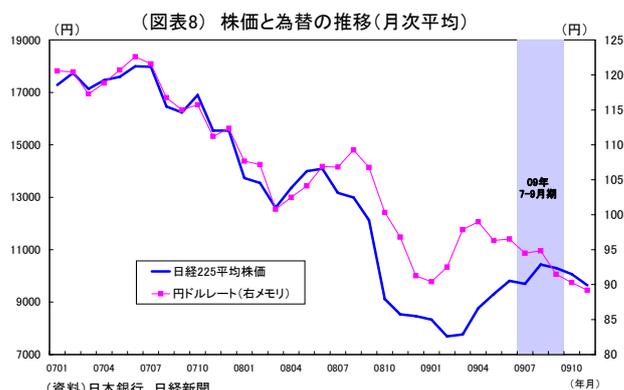
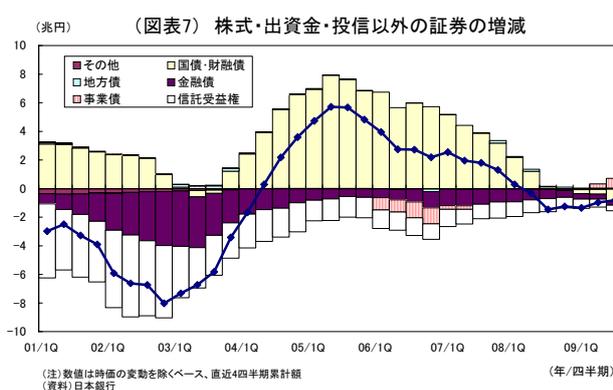
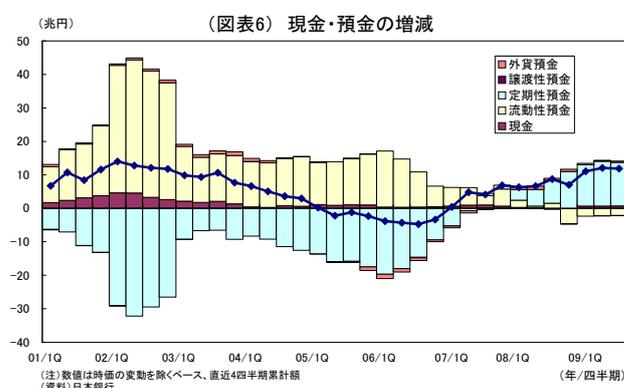
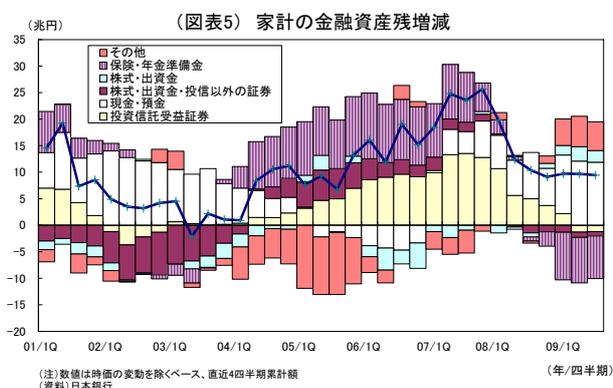


2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 安全性重視の姿勢は揺るがず

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、03年を底に金融資産への資金流入額が増加してきたが、07年をピークに減少に転じ、08年半ば以降横ばい推移となっている(図表5)。

内訳を見ると、08年以降は現預金、特に定期性預金への資金流入が顕著である。過去にも02年から03年辺りにかけて現預金への資金流入が起きたが、当時は金融危機やペイオフ解禁などを背景とした流動性預金への流入であり、今回の動きとは異なる(図表6~8)。前述の通り、足元では一部リスク資産への動きも垣間見られるものの主流は定期性預金であり、定期性預金への強い選好は、所得環境の悪化が続くなかで、安全性の確保を第一としつつ少しでも高い利回りを求める家計の運用姿勢を表している。資産総額が増加しない中での定期性預金へのシフトが続くようであれば家計資産の流動性低下につながるため、個人消費抑制の一因とならないか、注意が必要だ。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。